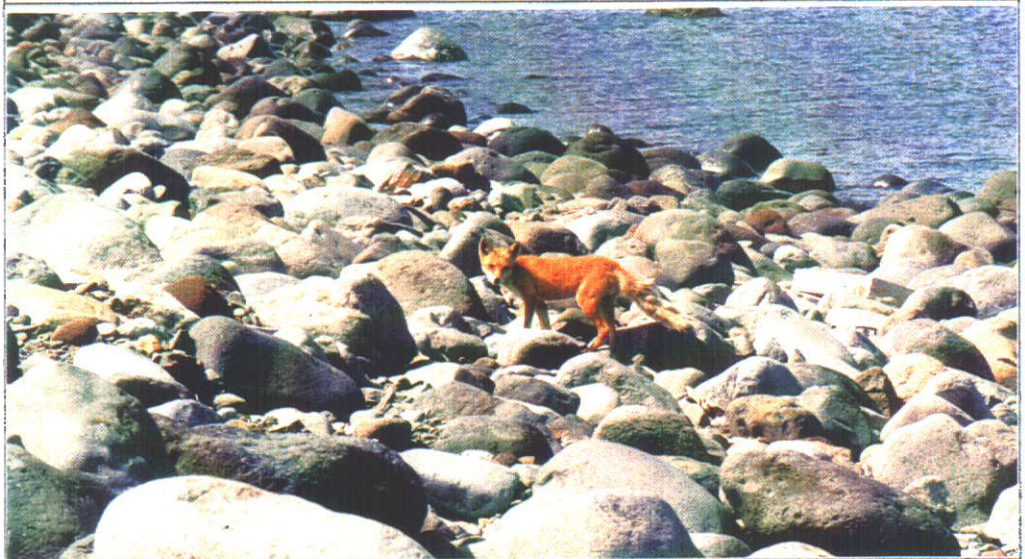


キタキツネは自然林地や高山よりも低地の農耕地周辺に多く生息しており、知床半島では半島基部を除きその生息密度は多くない。

今回調査においては9月28日にカラフトマスの死体を採食するためと思われる一頭がルシャ川河口近くの海岸で見られ（写真-27）、また、11月8日ルシャ川河口～ポンベツ川河口間の海岸平坦部で記録された。

（写真-27）海岸のエゾキツネ



〔一般鳥類〕

知床半島の鳥類については比較的古くから（1950年代）調査が行われており、文献調査では240種がリストアップされている。北海道内の大きな湖や干潟を含む地域では記録種数が200を超える場所も数か所知られているが、大きな湖や干潟を持たない知床半島での240種の記録は、海岸から高山帯に至る連続した原始的自然が維持されていることによる山岳や森林、沿岸海域の鳥類の多様性を示すものである。

今回の調査は、8月から11月までの短期間のものであり、また、調査時に雨や雪、強風など天候不順な日が多かったため、9目21科57種の確認にとどまったが、特記すべき種として、シラガホオジロ、ツメナガホオジロ、マダラウミスズメが記録された。

なお、過去の調査においてはクマゲラの生息も確認されている。

〔大型猛禽類〕

大型猛禽類は、地域の自然度を評価する上で重要な環境指標動物である。

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存法」に基づき指定されている国内希少野

生動植物種の大型猛禽類で、従来より北海道で観察された6種のうちイヌワシを除く5種（わしたか科：オオタカ、オジロワシ、オオワシ、クマタカ・ふくろう科：シマフクロウ）が今回の調査で確認された。

食物連鎖の頂点に位置し、広い生息域を必要とするこの種の大型猛禽類が見られること、また、「海ワシ」であるオジロワシ、オオワシはもとより、本来「山ワシ」としての生活形態を持つクマタカが確認されたことは、当地の多様な生態系を如実に示すものといえる。

*シマフクロウ

本地域は、以前からシマフクロウの生息地として知られていたところである。

今回の調査においては、個体の視認はできなかったが、羽毛（8月8日当年換羽期の成鳥初列風切り羽）及び鳴き声の聞き取り（11月22日：近接番屋住人）によりその生息があらためて確認された。

なお、本地域内では昭和59年から環境庁による保護増殖事業が実施されており、昭和60年、61年、平成元年、4年及び5年に計6羽の巣立雛が確認されている。

*オジロワシ

従来より知床半島における生息、繁殖が確認されており、半島における営巣つがいは10前後とされている。

今回の調査では、最も飛来数が多いとされる12月以降期の調査がなされていないが、10月の調査時に幼鳥9羽、成鳥1羽が確認されており、これにより調査地内の河口・沿岸に出現した個体数はほぼ正確に把握できたものと思われる。

なお、テッパンベツ川河口付近で同じ巣から巣立ったと思われる幼鳥2羽と成鳥が頻りに観察され、付近に営巣地があることが示唆された。

また、幼鳥（当歳齢）が河口付近の浅瀬からカラフトマスを捕食する場面や、打ち上げられた魚を採餌する若鳥が観察されたことから、オジロワシの若齢鳥にとって、サケマス類はこの時期の重要な餌資源となっていることは明白であり、容易に捕食可能なサケマス類が豊富に遡上するルシャ、テッパンベツ等の河川が存在は大変に貴重である。

*オオワシ

オオワシはアジア北東部に分布するわが国最大のワシタカ類である。

北海道から北日本に冬鳥として渡来し、特に知床半島は多数個体が飛来越冬することでも有名である。（ウトロ側で最も多い観察記録は1976年2月4日の218羽（中川1988）である。）

今回の調査では8月、10月に幼鳥1羽、11月に幼鳥1羽、成鳥2羽が確認された。

なお、繁殖期中の8月にオオワシが観察されることは極めて珍しく、特に観察された幼鳥が全身幼羽（1才齢未満の羽衣）の状態であったことは、今後さらなる実態調査が必要であるが当地におけるオオワシの繁殖の可能性を示唆するものとして特記される。

＊クマタカ

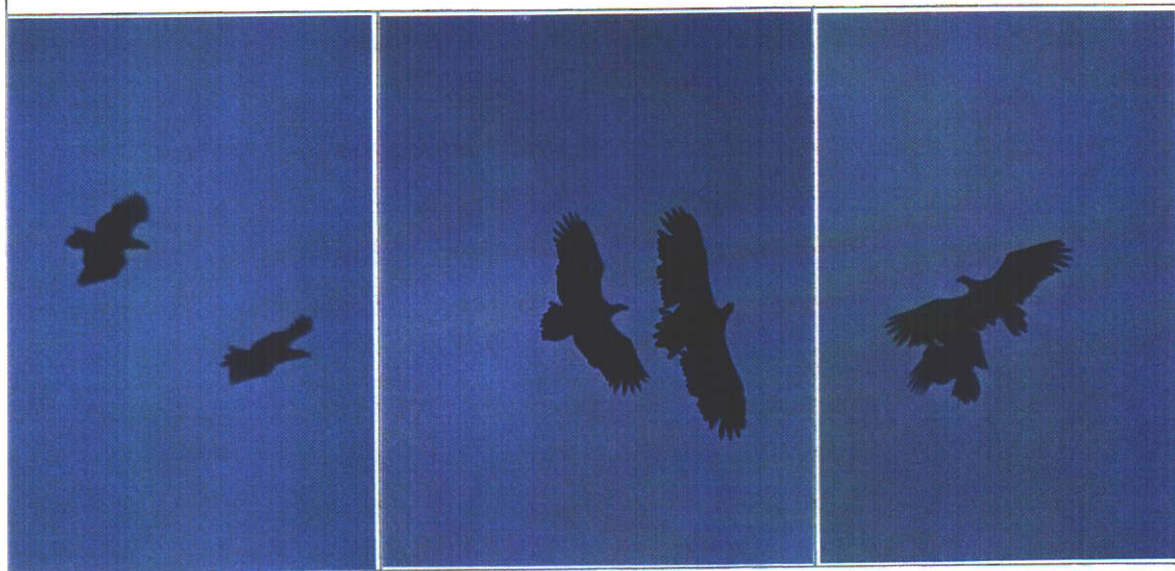
インドから中国南部、日本などの山岳部で繁殖する留鳥の大型猛禽類である。北海道での生息は知られていたが、知床半島における生態はほとんど解明されていない。

今回の調査でルシャ・テッパンベツ両河川間の尾根に1つがいが生息していることが確認された。

なお、11月には雌雄成鳥が並列して旋回飛翔するなど不完全ではあるがディスプレイ様の行動が観察され、付近において繁殖していることを強く示唆するものといえる。

また、9月の調査時には成鳥1羽がオジロワシの幼鳥にモビングをかけ、下方から腹を蹴り上げる荒々しい光景が観察されている。(写真-28~30)

(写真-28~30) クマタカとオジロワシ [モビング]



クマタカは本来「山ワシ」であり、オジロワシ、オオワシとは異なる餌及び営巣環境を必要とし、森林生態系の指標動物として重要であることから、オジロワシ、オオワシとのテリトリーの立体構造を含め、その生息実態、生態を把握解明する上で、当地域は極めて貴重な地域と言える。

3 ま と め

知床半島は千島火山群によって形成された複雑で険しい地形と、オホーツク海に突出した半島としての厳しい気象条件の故に、全国レベルで自然植生の占める割合の高い北海道でも最も原始的で豊かな自然が残された地域である。地域の広大さにおいては大雪山や阿寒の国立公園に席を譲るとしても、海から高山帯まで途切れることなく連続的に原生的自然環境が保持されていることと、人為による影響が極めて少ないことからして、生物多様性の保全の観点から、わが国の中でも極めて重要な地域の一つといえる。

ルシャ・テッパンベツ両河川の生態系を中心に、すぐれた自然生態系が維持された本地域の特徴は次のように要約される。

- ① ルシャ川、テッパンベツ川を中心として、知床半島の中でも最も大きく緩やかな地形を呈する原生流域である。
- ② 海岸部から高山帯まで、多様な植生タイプがモザイク状に連続して分布し、北海道の代表的な森林タイプである原生的な針広混交林がかなりの広がりをもって保持されている。
- ③ 大型哺乳類のヒグマ、エゾシカの生息密度が極めて高く、鳥類の生息種が極めて多いなど、野生動物の重要な生息地となっている。
- ④ 自然度評価の重要な指標動物であり、国内希少野生動植物種に指定されている大型猛禽類の5種が生息している。なお、従来より本地域において繁殖が確認されていたオジロワシ、シマフクロウに加え、今回オオワシ（日本での繁殖は未確認）とクマタカの繁殖の可能性を強く示唆する観察記録がなされた。
- ⑤ 知床半島でも数少ない、サケマス類の自然遡上・自然産卵の可能なルシャ、テッパンベツ、ボンベツの自然河川が当地域に集中し、本地域の自然生態系の骨格となっている。また、これら河川はオショロコマの生息密度も極めて高く、遡上するこれらの魚類は本地域の食物連鎖のピラミッド上、重要な基礎底辺を担い、ヒグマや大型猛禽類などの多種多様な野生動物の存在の基盤となっている。

このように本地域は、原始性の高い多様な森林植生と人為的影響の及ばぬ原生流域を保持し、遡上するサケマス類等の魚類を底辺とし、ヒグマや大型猛禽類を頂点とする食物連鎖、自然生態系が良好に維持されている地域であって、知床のみならずわが国でも他に類例を見ない原生的な自然環境地域である。

しかしながら本調査は、準備期間が少なく短期間の調査であり、必ずしも満足できる結果とはいえないものである。したがって、今後も引き続き継続的に調査がなされることが望まれる。特に今回調査で可能性が示唆されたオオワシ、クマタカの繁殖については、ぜひともその確認の調査が望まれ、また、北方地域の典型的森林タイプとしての針広混交林の遷移過程についても、長期の観察調査が望まれる。

また、本地域は、「国立公園特別保護地区」「国設鳥獣保護区・特別保護地区」に指定され、法的保護の網が被っているとはいえ、中心部に約1,200haの民有林を包含している。この民有林地についても、先に述べたように本地域の多様な生態系を担っているルシャ、テッパンベツ両河川の中下流域の重要部分を占め、ヒグマ、エゾシカ、大型猛禽類の主要な生息・繁殖域となっている。

このようなことから、民有林地も含め、ルシャ・テッパンベツ地域については、絶滅危惧種であるシマフクロウの繁殖期において、無秩序な人の入り込みを制限する対策を検討するなど、特に野生動物の生息環境の維持に留意する必要があると思われる。

